

2-2-7 カワウ

全長80～85cm、体重1.5～2.5kg。オスがメスより大きい
が、野外では判別が難しい。全身褐色がかった黒色。繁殖期
には頭部と腰部の羽毛が白くなり、目の下の裸出部が赤くな
る。ウミウは、ひとま
わり大きく、背面に緑
色の光沢があり、嘴の
黄色の部分の形状が
異なるが、非常に良く
似ているため、慣れな
いと識別は難しい。



■幼鳥



■成鳥(造巣期)



■成鳥(育雛期)

▶ 1. 分布と生息環境

20世紀前半までは全国に生息していたが、1970年代になると、集団繁殖地（コロニー）が愛知県鵜の山、大分県沖黒島、東京都恩賜上野動物園不忍池（飼育個体由来）の3箇所のみとなり、個体数も3,000羽以下に減少して絶滅が危惧された。主な要因は、河川改修や水質汚染などによる川魚の減少、PCBやダイオキシン類などの化学物質汚染とされている。1980年代には、化学物質規制による水質改善などによって個体数が回復しはじめ、2019年には、ねぐら・コロニーの数が全国で566箇所となり分布も拡大した（図2-13）。現在、カワウは北海道から沖縄県まで全国に生息し、推定個体数は約9万羽、そのうち半数以上が中部近畿に生息している（図2-14）。

▶ 2. 食性

河川や湖沼など内陸部の淡水域をはじめ、沿岸部の海水域や汽水域など幅広い水域に生息し、潜水して魚類を捕食する。1日の採食量は約500gとされ、ウグイ、アユ、コイなどの他、オオクチバスやブルーギルなどの外来種も多く捕食する。その他、ウナギやアカエイ、ザリガニなどの甲殻類、両生類の記録もある。

▶ 3. 繁殖や行動

早朝から日中は単独または群れで採食し、夜間は数十羽から数万羽の群れとなって水辺の林や湖の島などに集団でねぐらをとる。ねぐらのうち、営巢が行われるねぐらをコロニーと呼ぶ。産卵数は4～5個、巣立ち雛数は1～3羽である。日常的にねぐら・コロニーと10～15km離れた採食地とを行き来する生活をしているが、40km以上離れた採食地に通うこともある。季節移動や幼鳥の移動分散では、都府県境を越えて数百km以上におよぶ。

▶ 4. 被害の特徴

かつては鵜飼や良質の肥料となる糞の利用など共に暮らす文化があったが、人の生活様式の変化や生息環境の悪化により、現代では人との軋轢が生じている。カワウは適切な個体群管理が必要な種と認識され、鳥類では唯一、鳥獣保護管理法にもとづく第二種特定鳥獣保護管理計画の対象種になっており、年間2～3万羽が捕獲されている（図2-15）。

■採食地における水産被害

河川や湖沼などにおいて、アユをはじめとする放流魚や漁獲した魚の食害や網の破損、釣客がカワウを嫌うことによる入漁料の減少など、主に内水面漁業において被害が発生している。近年では、瀬戸内海などの海水面での被害も増大している。

■ねぐら・コロニーにおける植生被害や生活被害

巢材採集や踏みつけによる枝折り、糞による土壌変成などによって樹木が枯損する植生被害の発生、さらに進行すると土壌の流出に至る場合もある。人家に近い場合は、糞や鳴き声による生活被害も引き起こす。

図2-13 全国のねぐら・コロニーの箇所数の推移

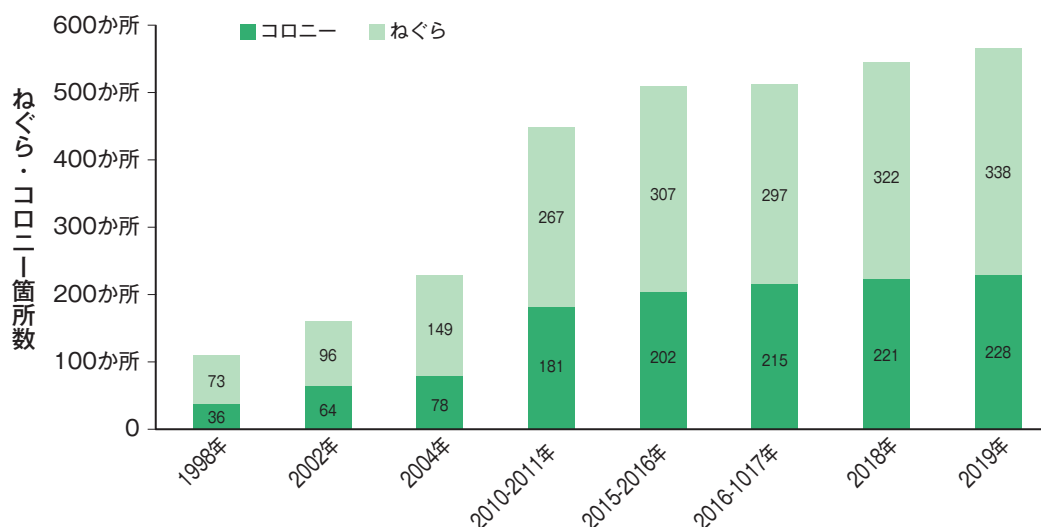
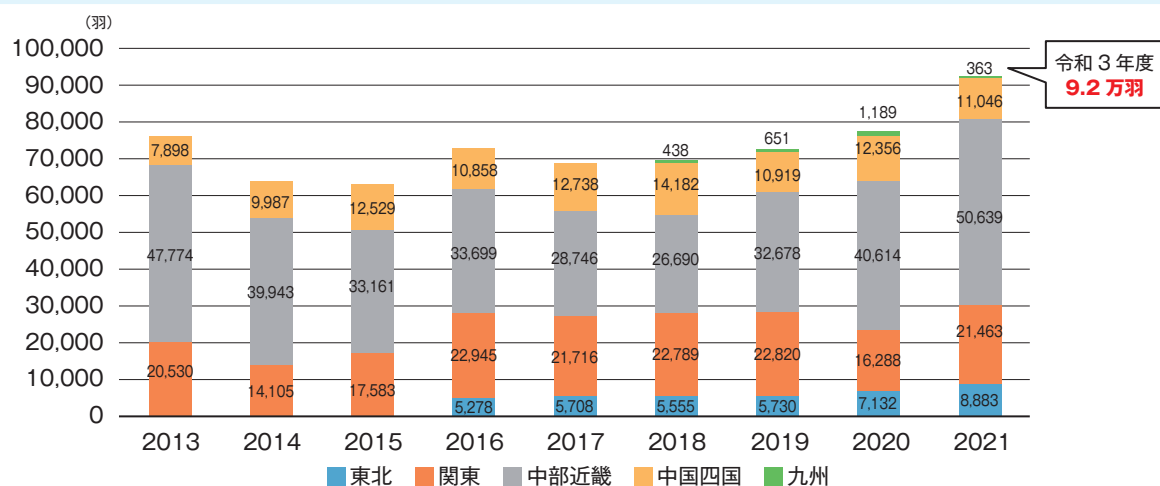
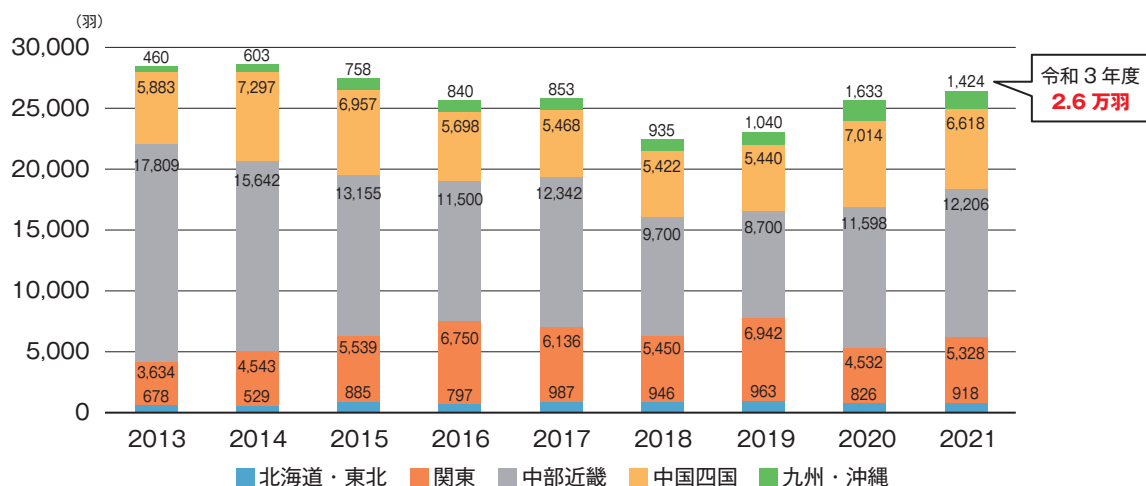


図2-14 全国の個体数の推移(夏期)



※下記の個体数を集計。夏期の個体数がない場合は、春期の個体数を採用。
 ※年によって、調査地点等が異なり、東北地方は平成28年度、九州地方は一部の県で平成30年度から調査を実施。
 ※平成26・27年度は、千葉県のデータ(例年5千～8千羽)がなし。

図2-15 全国の捕獲数の推移



データ:「カワウの生息状況と捕獲状況について」(環境省2023)